

肝臓がんになった人への治療も進んでいる。製鉄記念室蘭病院(室蘭市知利別町1)は昨年9月、最新の「可変型ラジオ波焼灼装置」を導入した。道内で2番目の導入で、がん周辺の正常な細胞や肝臓周辺の臓器を避け、腫瘍を焼くことができ、開腹手術と比

製鉄記念室蘭病院が導入した可変型ラジオ波焼灼装置。パックに入った針を患部に刺してがんを焼く



体への負担軽減

肝がん治療 最新鋭機器

製鉄記念病院 道内2番目

べ体の負担が少ない。

肝臓がん治療は主に①開腹手術②コンピュータ断層撮影装置(CT)画像などを見ながら、おなかに1・5センチほどの太さの針を刺してがんを焼くラジオ波焼灼療法③カテテルで血管に抗がん剤とスポンジを詰めてがんを兵糧攻めにする肝動脈化学塞栓療法がある。治療の選択はがんの大きさや個数、位置、肝機能などを総合して決める。

このうちラジオ波焼灼療法は手術と違って全身麻酔を行う必要がない。治療時間も早い場合で10分ほどと短いため体に大きな負担がかからない。同病院では2013〜15年に行った肝臓がん治療99件中27件でラジオ波療法を行った。放射線科の湯浅憲章医師は「2センチ程度の大きさのがん

であれば治療成績は開腹手術と変わらない」と語る。

新たに導入した可変型は従来型と異なり、がんを焼く針先を腫瘍の大きさに合わせ1〜3センチの範囲で細かく動かせるため、腫瘍周辺の損傷を最小限に食い止められるという。主に3センチ以下のがん治療に使われるが、肝動脈化学塞栓療法を併用したりすることで5センチ程度のがんも可能という。

ただ、肥満や飲酒、高齢などで肝機能が著しく低下している患者は、がんを取り除くと、肝機能がさらに低下し、肝不全になるため治療の対象外。湯浅医師は「定期健診で肝機能の数値が悪かった人は、普通の人よりリスクがある」と思っ注意してほしい」と話している。(生田憲)